板碑は語る

安久山を歩く

匝瑳探訪

―59―

今回から、明治22（1889）年の合併前の村（現在の字）ごとに、市内各地の史跡や歴史を紹介します。

安久山は、市内北部の飯高地区にあり、多古町に隣接しています。近年、民家の裏庭にある樹高25m、幹の目通り10mを超えるシイの大樹が「安久山のスダジイ」として関心を集めています。この大ジイは、県内で最大、国内4番目の巨木とされています。

この大木から南に進むと、少しくぼんだ所に日蓮宗の圓静寺があります。境内入り口左側に20基余りの板碑（板石の塔婆）が並んでいます。これらの調査研究が進んだ1970年代から、歴史研究者の間でこの寺が注目されるようになりました。

一見してただの平石に見えるこれらの板碑に刻まれた内容から、この地域の歴史の大きな変化を読み取ることができます。それは、古くからあったこの地域の仏堂が1330年代・南北朝時代に日蓮宗に改宗したことです。現在では市域北部や多古町に日蓮宗寺院が多く存在しますが、それらはここ圓静寺から広まったともいえます。

安久山に隣接した金原郷の領主に金原氏があり、そこの「金原法橋」という人は、日蓮の有力な弟子の1人に数えられ、1271年の記録にその名が見られます。

圓静寺境内の入り口に並ぶ板碑

安久山・金原地域は、千田庄に含まれ、領主千葉胤貞が現在の市川市中山法華経寺に金原郷の土地と堂を同寺3世日祐に寄進したため、この地域に日蓮宗の寺が建てられるようになりました。

金原氏の氏寺であった安久山堂が天台宗から日蓮宗に改宗したことを境内の「板碑が語っている」のです。また、圓静寺本堂正面に掲げられた板本尊は1419年のもので、安久山堂関係僧侶にまじって那須、林姓の有力農民層の名も刻まれています。

圓静寺入り口前の小高い場所に、いつもそよいでいる「揺るぎ松」といわれる北総の一奇樹がありました。1800年にこの揺るぎ松の伝説にちなんで、安久山村の木下氏により「揺松集」という句集が編まれました。この句集には、現市域の20か村、80人余りをはじめ全国から句が寄せられ、江戸時代後期に俳諧が盛んだったことが知られます。

松の木があった場所に現在でも松尾芭蕉の句碑があります。春の陽を浴びながら、巨木や圓静寺、句碑めぐりはいかがでしょうか。

問 八日市場図書館 ☎73・3746